

近代の立川流研究の端緒

——井上吉次郎著『文観上人』の誕生の背景を水原堯榮との交流から読み解く——

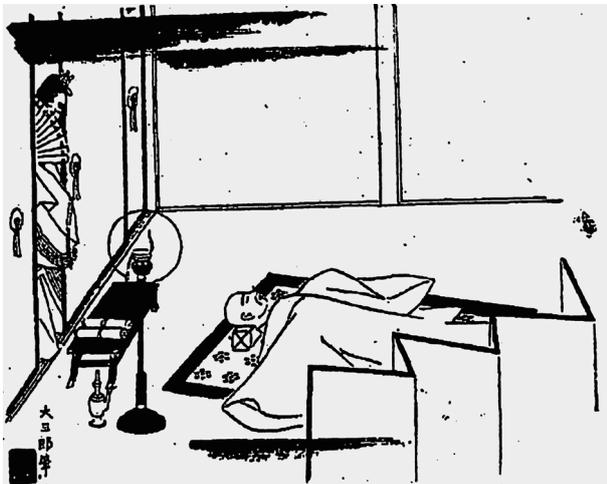
ラポー・ガエタン

Abstract

「文観が、その夜さ、また、夢をみた。愕然として、葎の上に突つ起つた。勿驅ない、明神さまと、契りを交わす夢をみた。殊に、まざまざと實感の迫った夢だった。」

昭和初期、ジャーナリストとして重要な役割を果たした井上吉次郎（二八八九～一九七六）による短編歴史小説『文観上人』の冒頭は、こうして、仏僧文観が明神と契る扇情的な場面から始まる。もともと「紅蓮三昧」のタイトルで、大阪毎日新聞の夕刊に昭和七年（一九三二）七月九日から三十日にかけて十九回にわたり連載された新聞小説である。冒頭の記述に続き、明神と呼ぶには艶めかしすぎる女性の身体的魅力が描写され、その後、夢の中とは言えその蠱惑的な女性と契りを結んでしまった文観は、慚愧の念に堪えず引きこもる。ところがそれも束の間、新たに稚児の美少年に明神の面影を見いだし、再び欲情する。もともと律僧として禁欲的な生活を自分に課してきた文観は、煩悶し苦しむ。しかし、やがて文観は一種の諦念の境地にいたり、あの悪名たかき「茶吉尼法」を産み出す。それは、「和合水に髑髏を染める」と百二十度なる奇怪な修法であった……。以上が、この短編小説の大筋の内容である。

この小説が、夕刊とは言え新聞に一定期間毎日連載されていたことを考えると、同じ紙面を埋めていた当時の新聞記事と、この中世を舞台とした厭世気分の充満した官能小説とが、かなりスキャンダラスかつシニユールなコントラストを生みだしていたであろうことは想像にかたくない。そもそもこの連



図一 大阪毎日新聞夕刊 1932年7月9日一面

載は、夕刊の第一面に目をひく挿絵とともに掲載されており、連載が開始された日には、「満州は我生命線、撤兵などは思ひも寄らず」というリットン調査団に対する日本の陸相・荒木貞夫の発言が、一面の大きな見出しとなっていた。その真下に、僧の寝所にまさに女性が忍び込まんとしている挿絵をかかげた冒頭の記述の通りの小説が展開されているのである（図一）。こうした調子で連載されていたばかりではなく、『文観上人』と題名を改め、筆者自身による関連歴史研究と合本の形で、昭和十二年（一九三七）六月二十日に単行本として公刊されている。ここで言う歴史研究とは、単行本『文観上人』所収の「註一」と題された八七～一四七頁を占める部分を言う。続いて「解一」（二四九～二七一頁）と題された哲学的エッセイおよび文観関連史料の紹介があり、最後に「附文」（一七三～一八三頁）が付載されるが、これは史料の翻刻で

め、筆者自身による関連歴史研究と合本の形で、昭和十二年（一九三七）六月二十日に単行本として公刊されている。ここで言う歴史研究とは、単行本『文観上人』所収の「註一」と題された八七～一四七頁を占める部分を言う。続いて「解一」（二四九～二七一頁）と題された哲学的エッセイおよび文観関連史料の紹介があり、最後に「附文」（一七三～一八三頁）が付載されるが、これは史料の翻刻で

ある。このように、小説の公刊本に付随している研究篇は、小説本体よりも長く、一次史料に基づく学術的な内容で、小説も真摯な歴史研究に基づいて練られた作品であることが分かる。

したがって、この小説を第一印象によって、一概に退廃的な官能小説として侮ることはできないのである。当時の毎日新聞夕刊には、谷崎潤一郎、泉鏡花、菊池寛ら錚々たるメンバーが小説を提供しており、「紅蓮三昧」の挿絵を担当した中村大三郎も、新聞連載開始の昭和七年時点では、帝展に八回入選し帝展審査員にもなっていた関西の美人画の名手である⁴⁾。ただ好奇の目を惹くための官能小説の掲載は、新聞社の方針でもなかったはずである。この著作の新聞紹介にも、直木三十五の著書『弘法大師物語』が好評であるのに刺激を受けて刊行されたとしている⁵⁾。また、井上吉次郎のジャーナリズムに関する随筆集を読むと、彼自身はむしろ世間におもねりたくない天衣無縫かつ破天荒な反骨精神あふれる人間だったと思われる⁶⁾。小説は、井上吉次郎が文観研究の結果、学術的作業のみでは理解しきれなかった疑問を昇華させたものであり、その点では合本になっている研究篇と補完関係にある。

なぜこの時期に、文観を対象とする小説が忽然と現れたのだろうか。筆者は、新聞小説に関しては門外漢であるため、この小説の文学的評価や文学史上における位置付けは専門家の手に委ね、専ら本作品が立脚する昭和初期の仏教研究の学術的背景を論じる。というのも、小説の内容が冒頭に紹介した通りかなり衝撃的であるために、特に歴史研究篇の部分には、これまで相応の注意が払われなかったからである。しかし、だからといってこの本が全く無視される理由にはならない。この小説の在り方そのものが、水原堯榮ら真言宗の高僧によって牽引されてきた戦前の文観研究の流れを体現しているからである。本論文は、戦前を代表する文観研究の大家である水原堯榮と、新聞記者であった井上吉次郎の接点を明らかにすることで、井上の著作に展開された文観研究の学術的価値を再評価し、文観および立川流研究のいわば研究前史に光を当てることを目的としている。

一・物語の主人公・文観と立川流

小説の主人公となった、文観房弘真(二二七八―一三五七)は、南北朝期に実在した僧で、はじめ律僧として奈良西大寺において修行を積み、次に正和五年(一二二六)醍醐寺報恩院の道順から伝法灌頂を受け、真言僧として活動し始める⁷⁾。元亨三年(一二三三)、勅により参内して以来、天皇の側近として活躍し、当時天皇であった後醍醐天皇(一二八八―一三三九、在位一二八八―一三三九)の護持僧という極めて王権に近い立場で、天皇の宗教的活動に参与する役割を担い、東寺長者・醍醐寺座主として実質的に当時の真言宗の権力の頂点に君臨する。それと同時に後醍醐天皇の倒幕計画にも積極的に関与することになる。このことから、文観は単なる精神的な指南役の立場を超えて、後醍醐天皇を頂点とする権力構造の中枢に位置していたと考えられる。自ら天皇に灌頂を授けただけでなく、天皇の希望に応じて様々な祈禱や儀礼を実施するなど、文観は実際に天皇周辺で多様な宗教的儀式を行ない、それに関連する多数の聖教も書写・作成した。後醍醐天皇の吉野潜行にも同行するなど、天皇と運命の浮沈をともし、天皇の死後も、その皇子であった後村上天皇に仕え、最終的には南朝の行在所であった河内金剛寺で執筆活動の後に没する。

小説は八〇頁ばかりの短編作品で、文観の波乱万丈の人生の全貌を描いてはいない。高野山において、学僧として知られていたが「邪見」の僧として、羨望と蔑視の対象であった文観が、山を降り、後醍醐天皇の側近として関東調伏をおこなった科による流刑を経、再び東寺長者として返り咲いて秘儀・茶吉尼法を修法するところで終わっている。文観の人生略伝を把握したうえで歴史小説のプロットを考えるなら、建武の中興から吉野潜行、そして後醍醐天皇の病死までが激動の時期として、作家としては最もやりがいのある主題であるはずである。なぜ、あえて学僧文観が東寺長者となるまでの時期を小説化したのだろうか。それは、作者・井上吉次郎の主眼が、文観という個人の人生そのものより、文観が創造し修法したという尋常ならざる秘儀におかれていたからだろう。

これは、井上吉次郎の想像の産物ではなく、現在でも文観の人物像を語る上で支配的な、いわゆる邪教・立川流の大成者、かつ「異形の王権」たる後醍醐天皇に仕えた「異類の僧」としての文観像と合致する。これは網野善彦により一般に普及したイメージだが、戦前の文観研究から頻繁に見られる言説でもあった。⁸この文観像の原点にあるのは、宥快（一三四五―一四一六）による『宝鏡鈔』（二三七五）で、そこには建武二年（二三三五）、高野山金剛峯寺の衆徒が呪術である茶吉尼法を文観が修法したことを非難したとする文書の引用があり、しかもこの邪法によって後醍醐天皇に取り入り権力の中核に近づいたことが攻撃されている。文観を異端視する見方は、宥快のこの著作が出发点になっていると考えられる。⁹一方、十三世紀後半の心定という僧によって、髑髏を本尊として性的な特殊な儀礼を行なう集団が記録され、批判されている（『受法用心集』一二六八年）。『宝鏡鈔』では、この集団の儀礼が「立川流」によるものであるとされ、文観も同じ文脈で批判される。しかも、その後の真言宗では、この考え方がそのまま継承され、中世に存在した様々な流派や教義が「立川流」という範疇に類型化され、邪法の典型もしくは代名詞として一般化されるようになった。¹⁰

興味深いのは、文観のおかれた具体的政治状況の記述など、私小説ではない普通の小説ならナレーターが担うはずのところ、往々にして高野山の無名の僧侶たちの台詞として表現されることである。文観が高野山を去ってからの情況も、この僧侶達の噂話の形で描かれることで、小説の語りの舞台があくまでも高野山であることが示唆される。この描写方法からも、高野山の僧侶の非難を記述するというレトリックをとる『宝鏡鈔』を参考に、小説の設定が創り上げられていたことが推測できる。¹¹

実は、異端としての文観像の再考は、すでに戦前からごく一部の歴史学者によって提唱されてきた。例えば、東京大学史料編纂所の黒板勝実は、近代の実証史学の方法論に基づき、文観を非難する『太平記』にのみ依拠するのではなく、一次史料に基づきその人物像を追究する必要性を訴えた。¹²『太平記』は、網野善彦が、関東征伐のために調伏を行い「異類異形」の「悪党」と交わった「異類」の僧正としての文観像を導き出すために、『宝鏡鈔』

とともに特に重視している史料だが、明治初期にはその史料的価値をどう評価するかが議論の対象になっていた。¹³黒板勝実の説をうけて美術史家の藤懸静也は、文観作の画像の裏書き史料など新出の一次史料に基づき、文観の特殊信仰と後醍醐天皇との関係を分析した。そこには卑猥な呪術や淫祠邪法をつかさどるという史実は確認されない。¹⁴両者の実証的研究に基づき文観の史実を検証した結果、歴史学者の中村直勝は、『宝鏡鈔』、それに基づく『続伝燈広録』、『太平記』など文観に批判的な記述を含む史料に内在する政治的意図を読解するにいたり、文観が必ずしも「立川流」と同一視されたり異端視されるべき存在ではないという結論に達している。¹⁵この見解は、参照できる史料の増えた現在の最新研究の成果とほぼ合致するものであるが、井上がこうした当時最新の実証的歴史研究を参考にしていないのは明らかである。¹⁶

そもそも、井上吉次郎の小説は、歴史的事象を追うことが目的でなかったと考えられる。その証拠に、小説には文観の人生に大きな影響を与えた後醍醐天皇は一度も登場せず、台詞がある具体的な登場人物は、主人公の文観、明神の化身として現れる女、稚児のみである。文観以外に、歴史上実在した人物が全く登場しない。現在の研究に基づく文観の実際の伝記では、文観が高野山に修学したことはおろか、長期滞滞在したことも確認されていないのに、高野山が重要な舞台とされている。さらに、文観が関東調伏に関わった経緯など、歴史小説には当然欠かせないと思われる政治的な場面が全く描かれず、夢に現れたという明神の女や稚児と文観がからむ場面が無意味に長く続いているように感じられ、これは小説の一つの謎となっている。こうした謎は、新聞記者であり情報収集能力に優れていた井上が、広く文観について取材するというより、ある特殊な情報源に基づいて小説を起草していたことを示唆する。これを解明するために、次節では、井上の背景を追うことにする。

二. 研究者としての井上吉次郎 高野山とのつながり

小説の作者・井上吉次郎は、小説発表当時は大坂毎日新聞社の学芸部長であった。その人生略歴は『日高町誌』の人物誌によれば、「記者生活三十年、

学者的存在三十年」であったといい「記者的学者、学者的記者」と評される。⁽¹⁷⁾二七歳で大学卒業後すぐに東京日日新聞に勤め、新聞記者としてイギリスに留学した後、昭和九年以降大坂毎日新聞学芸部長となり、⁽¹⁸⁾五十五歳で終戦の前年に定年退職した後も、新聞社の顧問嘱託となり、戦後の新大阪新聞創刊の主筆になるなどジャーナリズムの世界にとどまる。しかし、昭和二十四年以降は、関西大学、追手門大学、浪速短期大学などの職を歴任し、研究にいそしんでいたことが知られる。

出身地は和歌山県日高郡日高町志賀村で、村出身の有志により結成された志賀村学生会のメンバーにも名を連ねていた。この学生会が、村出身の偉人とされている徳本上人顕彰の碑と遺跡を整備した際には、幾許かの寄付金を寄せている。⁽¹⁹⁾日高郡は熊野古道の紀伊路の通っていた場所で、志賀村は九十九王子社の一つ志賀王子（志賀王子神社）が現在も残る場所である。歴史的な逸話にことかかず、神秘的な幽谷に囲まれた信仰深い土地柄での生い立ち、井上吉次郎の特に関西赴任後の学芸部長としての嗜好や活動に大きく影響しているように思われる。⁽²⁰⁾

大坂毎日新聞学芸部長時代の井上吉次郎の行動は、彼自身の書き遺したもののより、その部下であった井上靖（一九〇七～一九九二）の随筆や作品により詳しくわかれる。小説家・井上靖のデビューは歴史小説『流転』が『サンデー毎日』の懸賞に優勝したことに始まるが、それを足がかりに井上靖の毎日新聞社への就職斡旋を依頼したのが、靖の岳父の京大教授、足立文太郎であり、この斡旋を引き受けたのが井上吉次郎である。⁽²¹⁾井上靖をして「私を書き人問として大切なことを、何から何までみんな氏から教わった」と言わせしめた井上吉次郎の仕事ぶりとはどのようなものだったのか。

井上靖関連の文献を通じて見えてくる井上吉次郎は、靖をともない、毎週のように奈良や高野山に足繁く通い、なおかつ仏教経典にも通じていた知の巨人である。靖に、宗教欄を受け持ち、経典の解説をするように命じたのは井上吉次郎だった。それまで井上靖は「宗教については何の関心も知識も持っていなかった」が、『般若心経』、『華嚴経』、『碧巖録』などを濫読し、「経典というものが、ドラマであり、古譚であり、エッセイであること」を知っ

たのだと言った。⁽²⁴⁾「井上吉次郎」氏は大学を出たばかりの新米記者など傍に寄りつけぬほど、多方面な知識を持っていた。⁽²⁵⁾実際、井上吉次郎の著作は二七冊に及び、また三〇〇編ほどの随筆が遺されているが、その興味は現代の学問領域で言うところの、社会学、ジャーナリズム学、文化人類学、民俗学、仏教哲学、美術史学（陶器・工芸も含む）と多岐にわたる。⁽²⁶⁾しかし、やはり随筆「高野の獨壇場」などにも表現されているように、高野山には格別な思い入れがあつたようである。⁽²⁷⁾戦争末期には、井上吉次郎は靖に「おれもなるから、おまえも入山しろ」とすすめ、高野山で僧侶になる計画すらたてていた。⁽²⁸⁾その背景には、高野山親王院の水原堯榮（一八九〇～一九六五）および中川善教（一九〇七～一九九〇、水原の後継者で親王院の住持）の二学僧との交流がある。実は、この水原堯榮こそ、戦前の文観関連研究の中でもとくに重要な『邪教立川流の研究』（一九三三）の著者であり、井上吉次郎の小説執筆に大きな影響を与えた人物と考えられる。⁽²⁹⁾

井上吉次郎自身は、自分の個人的人間関係をあまり文章におこすことがない人間なので、彼が高野山の学僧・水原堯榮とどの程度近しかったのかは、井上靖の仕事から推察するほかない。靖の言葉によると、水原堯榮は井上吉次郎と親交があり、また彼自身も親しくしていたという。⁽³⁰⁾仏教経典や宗教への研究へ井上靖をいざなつたのは井上吉次郎なのだから、水原堯榮をもともと知っており、紹介したのも吉次郎であろう。⁽³¹⁾

井上靖の作品に、高野山を舞台にした小説『澄賢房覚書』（一九五二）というものがあるが、この小説の完成には、大いに水原堯榮の力を借りたと、随筆「若き日の高野山」において述べられている。⁽³²⁾『澄賢房覚書』は、志半ばにして破戒僧となり高野山を降りた僧・澄賢房が、老年期にさしかかり、高僧となつたかつての同輩に邂逅するという話である。もっぱら高野山において話が展開しており、この聖地の雰囲気や空気をまざまざと感じさせる印象的な文体である。

井上靖によれば、この作品の執筆のため、高野山親王院に宿泊させてもらい、水原堯榮、中川善教両師から話を聞いたばかりではなく、古文書の文章の調子を出すために、中川師に文章の添削加筆までしてもらつたと言った。⁽³³⁾（高

野山の雰囲気はこうした文体の工夫に拠るところが大きいだろう。³⁹しかも、新聞記者時代には、経蔵なども見せてもらうなど深い関係にあったようである。井上靖が結んでいた親交を考えると、それ以前から両人と知り合っていた井上吉次郎も同程度かそれ以上に彼らと深く関わっていたと考えるのが自然である。井上も同様に経蔵を閲覧していた根拠としては、『文観上人』研究編において引用される『阿吽字義』がある。これは、現在所在未確認の史料ながら、水原堯榮作成の立川流聖教リストには私蔵の史料として挙げられており、³⁵井上が著作で四頁（一六五―一六八頁）に互り翻刻もしていることから、水原私蔵本を閲覧させてもらっていたことは明らかである（水原が自身の著作で引用している箇所とは別の箇所である）。水原私蔵本の引用例としては、他に著作の研究篇末尾「附文」（一七五―一八三頁）内に翻刻された聖教「秘密五輪集 無畏三蔵撰」がある。³⁶また、新聞小説の第十六回（七月二八日）の挿絵（刊行本への転載なし）は、「大三郎謹写」なる「立川流本尊」画像なのだが、これは前述した水原堯榮の著作初版本の一三〇―一三一頁の間の口絵にみられる画像と一致する。³⁷美術学校で教育を受けた中村大三郎が自ら求めて高野山の学僧の執筆した学術書に範を求めたとは考えにくいいため、これは著者が中村に指示したものであろう。³⁸

したがって、こうした点からも、小説の創作にあたって、井上吉次郎が水原堯榮の著作を参考にし、経蔵を閲覧させてもらい研究を行ったことはほぼ確実である。つまり、この小説の執筆の背景には、水原堯榮との深い交流が存在したことを意識する必要がある。そこで、高野山の学僧・水原がどのような文脈で立川流研究を始めることになったのか考察しよう。

三、高野山の学僧・水原堯榮のつくった立川流のイメージ

管見の限りでは、³⁹水原以前の近代において、文観研究が始まった契機は、「立川流」問題である。ここで、「立川流」研究ではなく問題と定義したのは、明治時代の啓蒙的仏教系雑誌において性的問題が取り上げられる文脈で、「立川流」の存在が倫理的に問題視されたためである。明治期に、日本の信仰形態が徹底的に解体され、神道・仏教・キリスト教が公認宗教として定義

されていく過程で、新時代の政治思想に相合する新たな道徳が社会の要請として求められ、この文脈で既存の宗教団体の在り方や信仰のある側面が合理的主義的な立場から断罪されることになった。公認された神道・仏教・キリスト教も、平等の権利を有していたわけではなく、国家体制に密着した存在となった神道に対しては、キリスト教および（仏教の中でも）真宗が、神道の「淫祠邪教」的側面への非難を強めた。しかし、近代化を大義名分とするこの弾劾の根拠を形作っていた当時の社会の「淫祠邪教」観は、むしろ伝統的なイメージに依存していたのである。⁴⁰「立川流」が議論の俎上にあがってくるのも、この文脈である。数少ない例をここに挙げてみる。

一八九六年、東山逸衲は、当時蔓延していたという淫祠に対して、性的内容を含む儀礼が真言宗内においてどのように出現したのかを問おうと問題提起している。⁴¹この中には、『宝鏡抄』における文観批判を根拠に、文観が立川流同様の邪義であろうと推測されている。⁴²この論考に呼応して、大内青巒（二八四―一九一八）は、⁴³「儒々居士の別号で投稿し、文観の問題点は権力の中枢に邪義をもちこんだことにあるとする。この論考の目的は、文観の仕えた後醍醐天皇を擁護することであり、仏教説話における阿難の例を出すことで「邪正」の判別の困難さを説き、宗教界再編の明治の世への警鐘ともみるべきだと説教する。⁴⁴

一方で、真言宗内部では、文観の名は邪教の代名詞ではなく、空海研究の文脈で初めて登場する。高野山の高名な学僧・長谷宝秀（一八六八―一九四八）は、弘法大師に関する講演会で、空海筆の『御遺告』を高野山へ寄進したという文観の事跡を聞き、初めてこの僧に興味を持ったと述べている。⁴⁵つまり、この時代では、文観の名前はほとんど知られていなかったようである。⁴⁶明治期において、文観を立川流との関連で言及した最初の真言僧は、小島昌憲である。彼は、真言宗内の淫祠的な流派が一概に「立川流」と一般化されていることに反対し、教義のみにて類似の説を論じた「理論派」と、教義の何たるかさえ知らずに実行した「実行派」の二派があることを指摘した。また、真言宗と一口に言っても一枚岩ではなく、修験宗・立川流・普化宗（虚無僧）ほかに僧服を着た俗人が混在し、徳川時代以降は特に妻帯など本来の真言僧

においては厳しく禁じられていたことが慣習化したことを指摘し、それらと本来の真言宗を区別すべきであると述べ、立川流を田舎の風俗にすぎなかつたとして簡単に片づけている。⁽⁴⁸⁾ただし、この論考の第一回直後に、「事我が宗の祖師に關する者決して輕々に附すべき者に非ず」と反発がすでにあらがっていることから、あまり好意的には受け止められなかつたようである。⁽⁴⁹⁾これを受けて、真言宗内で「立川流」研究が本格化することになる。荒井眞盈は、初めて真言密教の經典を繙きながら立川流の源初を探究しようとした意欲的論考を発表する。⁽⁵⁰⁾この論考の特徴は、立川流を一方的に非難の対象にせず教義においては一定の評価を与え、立川流に分類される仁寛や文觀個人を全面的に非難するのではなく、彼らが突出することになった時代の歴史的潮流に着目することを提唱する。⁽⁵¹⁾それと同時に、僧の妻帯・肉食の是非をめぐって当時紛糾していた仏教界に關しても疑義を呈している。荒井にとつてこれらは対比されうる現象であつたのである。⁽⁵²⁾

明治維新後、版籍奉還・廢仏棄釈により經濟的に疲弊していた寺院に追い打ちをかけるように、僧侶に妻帯肉食を勸告(許容)する布告が出される。(明治五年太政官布告第二三三号)⁽⁵³⁾これは、剃髮得度により出家者となる僧侶の公的身分を、近代的な国制法に合致しない宗教上の慣行として否認した動きともいえる。しかし、これはあくまで国政上便宜的なもので、一部の僧が誤解したように、結婚・性交の強制ではなく、従来通り戒律を遵守するか否かは個人の裁量に任されていた。⁽⁵⁴⁾その一方で、近世以降の仏教では、戒律の遵守が有名無実化し、肉食妻帯の破戒行為が蔓延していた実情もあつた。⁽⁵⁵⁾そのため、僧侶の妻帯が公権力により認可されることは、戒律の存在によりかろうじて担保されてきた(真宗を除く)仏僧の「聖なる者」としての世間体の喪失につながつた。⁽⁵⁶⁾新時代に対応するべく苦慮していた各仏教宗派では、伝統復帰の方向で徹底的な戒律復興を急務とするのか、新体制に与して寺院の没落に歯止めをかけるのが重要課題とされた。⁽⁵⁷⁾ここでは紙面の都合から詳細は割愛するが、明治三十年代頃まで、仏教系雑誌・新聞『明教新誌』、『密嚴教報』、『六大新報』などにおいて喧々諤々の議論が繰り広げられることになつた。⁽⁵⁸⁾これは、明治維新以降、深い打撃をこうむつてきた仏教界が、自らの存

在意義を問われるような本質的命題をつきつけられた、極めて切実な問題であつた。

特に、真言宗の密教学僧に見解の表明の場を提供した『六大新報』においては、明治三六年(一九〇三)に、高知県のある真言僧が苦惱の末、ついに自らを去勢したことから妻帯論・女犯論が白熱化する。この僧は、かつて学んでいた高野山の学僧・土宜法龍、長谷宝秀に対しても弁明の書簡を送つており、五部秘經を繙いても妻帯・女犯を擁護する教理がみつからず、苦慮した末に世間に向けて身の清廉を証明するために自ら去勢をしたと弁明している。⁽⁵⁹⁾現行の法と既存の倫理の相剋を真摯に嘆き絶望した結果、こうした蛮行を自らに強いる僧すら現れたことは、高野山の理知的な高僧・学僧にも衝撃をもたらしたに違いない。

このような文脈で立川について論考を発表した荒井眞盈は、「立川流」が安易に淫祠邪教の一環として全面否定される世相と、世の潮流を度外視して因習に固執する当時の風潮を比較し、固定觀念に基づいて史料も読まずに教義に対して画一的な評価を行うことを遠回しに批判していると考えられる。⁽⁶⁰⁾水原堯榮の立川流研究も、仏教者の性愛問題という当時喫緊の課題をかかえた世相を背景に始まつたことは、その最初の論考「立川流聖典目録と現存聖教の内容に就いて」(二九一九年八月執筆、一九二〇年上梓)の結論で展開される問題設定からも明らかである。⁽⁶¹⁾「今や平和和來の高唱の反面、西歐には大亂の後國家の爲め、民族の爲め、種族保護の爲めとかにて國に由りては法律を以て男女關係を強要せりと傳へられる、思ふに是等は形をかへ、口實を變へたる立川流の出現にあらざるか、人道上許すべからざる問題の顯現は吾等をして身に粒粟を生ぜしむるのである。」(五七七頁)そして、八百年前より伝えられた「立川哲學」の内容と現世哲学の関連性を考察すべきであるとしている点で、先行の荒井眞盈の意を汲んでいると思われる。⁽⁶²⁾

高野山でも、男女關係をめぐる問題は、明治五年の僧侶妻帯の勸告を受けて、同年結界が解禁され女人の登山參拜も自由化されて以降、度々議論の対象となつた。公権力の圧力で女人禁制が解かれたことを、高野山の歴史・伝統・「聖性」つまりアイデンティティの蹂躪と捉える僧も多かつたからであ

る。そのため、明治政府への反発が早くから始まり、布告御取消の嘆願書が提出されたばかりか、肉食・妻帯の許可による山内の風紀の乱れが憂慮され、明治十三年（一八八〇）には山内七十一院が連署して規約を制定、女犯肉食がかえって厳しい取り締まりの対象となり、一時期は女狩りの様相を呈した。しかし、社会的な変化に伴い、諸規則の遵守がますます困難となり、大正十五年（一九二六）高野山内住侶の結婚式が公然と行われ、初めて高野山僧侶・住職の妻帯が完全に社会的に認知されることになった。⁶⁴

実は、水原堯榮自身は、高野山における女性問題に対して、執筆活動を通じて積極的に関わっていたといえる。『邪教立川流の研究』の翌年に著された『女性と高野山』（一九二四）において、高野山における女人の歴史を、源初の明神信仰から明治の太政官布達以後まで、文献に基づく実証的方法で論じ、女人禁制が、実態としては幻想に過ぎなかつた事を指摘している。水原の真意は、さらに翌一九二五年に出た論考でより明解に表現され「女人禁制」といふ、高野山としては、最大重要な問題であつたことがらも、現代の婦人からは、昔の夢物語りとして取扱はれて、現代人の頭を支配する何物をも持つてゐない。いはゞ女人禁制といふことは、今古記録上の死物である。」とまで述べている。⁶⁵ 水原の見解は、現実社会の変化に即して臨機応変に対応すべきであり、女性を一方的に欲情の対象として見るのではなく、女性も等しく文化に貢献し、信仰と教養を必要とする存在である、という極めて理性的・現実的なものであつた。

水原堯榮の「立川」研究においても、こうした現実的視点が貫かれていた。すなわち、人間が生きていれば必然的に生ずる「性慾」は排除されるべきではなく、これを克服することが聖者の本分であつて、いわゆる「立川流」を始めた任寛・文観・道順なりの高僧は、こうした性欲克服・浄化の過程を洗練させ究めようとした結果、教説なり芸術的儀礼を生もうと試みたと理解している。⁶⁷ しかし、その試みは時代や当時の状況により失敗し、一学派を築くどころか淫祠邪教や迷信の様相を呈するに至つたとして、本文ではその変遷を詳しく追っている。立川流そのものが結果として邪流の烙印をおされたとしても、その理論を完成させようとした文観の志（と一部の業績）を水原が高

く評価しているように読むことができるのはそのためである。⁶⁹

この書籍の新刊広告が掲載された『六大新報』（大正十二年、一〇二号）の一面社説「性慾道德と宗教」には、極端な貞操観念により生ける人間を律することは、却つて人間の自由を束縛するのだから、新時代の新しい性道德が必要とされている。男女の性欲性交はそもそも人間発生の根本であり、これが不浄不徳であるとすれば人間存在の否定にもつながる危険な虚無思想である。真言密教は、既成宗教の中でも、性の道德を有する点では特別なのであり、率先して性愛の「浄化」が人間完成の一大哲理であることを説くべきである、⁷⁰ といった主旨の提言がなされている。これは水原の立川研究の意義を汲んでおり、このような新時代の性愛哲学の啓蒙書としての期待が水原の新刊にかけられていたと言える。⁷¹

しかし、水原の論旨は、複雑な論理・難解な文体のためか、一部の例外を除き一般的には理解されず、数々の「非難攻撃」を受けた。⁷² これは、水原による文観の学業への評価と、立川流への邪流としての判断の区別が付けづらいうことに起因し、ある書評は「立川流に對する著者の根本思想が確定してゐない」と批判した。⁷³ また、文観を立川流の後継者もしくは完成者と確定するための徹底的な史的根拠に欠けることも指摘され、これは現代の研究者もこぞつて水原研究に對し批判している点である。⁷⁴ 更に、性の問題が「近年軟弱な学徒」の間で話題であると言つても、あえて立川の邪義を堂々と開陳するより、「一たい性の問題は理趣經で立派に解釋が出来てゐる」のだとも提言される。⁷⁵ 実際、水原の『邪教立川流の研究』出版の七年後に、やはり高野山の学僧で、高野山大学教授でもあつた梅尾祥雲（二八八―一九五三）による『理趣經の研究』が世に出て、こちらの著作は現代の真言宗における象徴的次元での欲望（性愛）肯定論を定説化させた研究と位置付けられ評価されている。⁷⁶

もちろん水原自身は、当時の宗教界の知識人同様、いわゆる「立川流由来の邪教」が、安易な民間宗教として現代まで生きながらえているとすれば、それは撲滅すべきだとしている。⁷⁸ 著作出版を機に催された高野山大学での講演会でも、誤解を解くべく邪流邪法の打破を唱えた。⁷⁹ ただ、表題に「邪教」

の二字が冠せられているために、様々な誤謬を生んだと考えられる⁽⁸⁰⁾。もちろん、水原の真意を汲んで、水原の立川研究を、密教に対する世間の誤解を解こうとした意欲作と理解を示す評もあった⁽⁸¹⁾。

確かに、一般社会における水原の著作の影響は大きく、これ以後数々の書籍が立川について言及するようになるが、「立川」というシンボルの強さに負けて、婉曲的な言い方で表現された水原の真意は理解されないどころか、卑猥な邪教としての「立川流」という範疇が、広く社会に受容されることになる⁽⁸²⁾。その現象が端的に表出されたのが、文部大臣の諮問機関として第二次宗教法案の草案作成のために、一九二七年に開催された宗教制度調査会である⁽⁸³⁾。そこでは、信教の自由を侵害しない範囲で、国体に合う既成の宗教団体と、風俗壊乱の迷信（邪教）が区別され、その取り締まりと分別方法が論じられた。この文脈で立川流が仏教の邪教の代表例として挙げられたのである⁽⁸⁴⁾。著名なチベット仏教研究家の河口慧海に至っては、立川流を根拠として真言宗そのものの否定につながる論考を執筆した⁽⁸⁵⁾。

また昭和五年から七年（一九三〇～一九三二）にかけては、いわゆる「エロ・グロ・ナンセンス」と言われる文芸思潮のブームがピークを迎え、立川流の主題は、このブームの中で恰好の対象として消費された側面もある。中野江漢『回春秘話』（一九三三）や『邪教に迷はされた人々 被害實話』（一九三三）はその好例である。昭和七年に連載された井上吉次郎の文観小説も、このような大衆向け読み物として受け止められてしまった可能性が高い。

しかし、このエロ・グロの文芸思潮は、単に今日言うところの淫乱・猥褻とは違い、ファシズム時代前夜における庶民・知識人の逼塞した現実からの逃避もしくは反逆であり、プロレタリア文学とも並ぶような婉曲的な反権力闘争でもあった位置づけも存在する⁽⁸⁶⁾。このブームの興隆した時期は、ウォール街に端を発した世界恐慌が日本に上陸し、未曾有の不況が日本社会を覆い、更に昭和五年年末に時の内閣・浜口首相が狙撃され、軍部のクーデター未遂（昭和六年三月）が勃発、さらに柳条溝事件をきっかけに満州事変が始まり（同年六月）、日本が戦争への道をひた進んでいた時期と一致する。もちろん時の権力も、猟奇的出版物の反逆的な匂いを察知し、当然検閲・発禁

対象としてコントロールしようとしており、そのさ中で人目をひく新聞の一面に、本稿冒頭で紹介したような文章ではじまる『文観上人』を掲載するには、それなりに言論人としての気概を必要としたに違いない⁽⁸⁷⁾。つまり、井上吉次郎は奇を衒うためにこの小説を安易に連載したわけではないと言える。しかも、小説が刊行された一九三七年の時点では、すでにエロ・グロのブームは下火となっていた⁽⁸⁸⁾。

ただし、性的な場面も多数含む小説を、堂々と新聞の一面へ発表するのを、生涯不犯を通じた高野山の高僧・水原がなぜ許容したのが疑問として残る⁽⁸⁹⁾。間違つた立川流像や文観像が流布するのを危惧しなかったのだろうか。既述のように、この小説の出版後も、井上吉次郎が高野山の末寺の住職になれるよう水原が働きかけていることから、別段親しいつき合いを断絶していなかったとかがえる。むしろ、これから述べるように、水原は物を書くことを生業とする人間を警戒するどころか、その交流はますます広がっている。筆者は、第一節末尾において、「明神の女や稚児と文観がからむ場面が無意味に長く続いているように感じられ、小説の一つの謎となっている」と自問した。この問いは、水原が井上吉次郎の『文観上人』をなぜ否定しなかったのかという疑問と関連している。

小説は、文観が大成した修法を執り行う場面で終わっているが、それを表現する「和合水に髑髏を染めること百二十度」といった文言は、『受法用心集』の儀礼の核心部分に触れるものであり、文観を邪教・立川流と結びつけようというレトリックの下に執筆された『宝鏡鈔』のもたらす文観異端像を一見踏襲しているように映る。一方で、研究篇では、文観の著作が『受法用心集』にある教理とは異質なものであることが指摘される（『文観上人』一〇三、一一九頁）。さらに「文観は、前後の立川流派の如きものと趣きを異にして居るが、その比注『文観の著作』『註理趣経』が極はどいところまで行つて危険だ……文観を立川流の大成者と解しても思想史的には正しい。しかし、文観は、所謂立川流の派僧ではなかった。立川流で行動して居ない。」（二七〇～二七一頁）という見解に達しており、小説と研究の間に齟齬をきたしているように見える。しかし、小説の記述も本来『受法用心集』に見られるよう

な過激な記述をそのまま用いているわけではなく、その儀礼を忠実に修法したとも明確に言っていない。この場面全体が、あたかも文観の妄想であるかのような描写である。

「怪奇な想念に、座主、地位を忘れる。」(八六頁)

このように、文観修法の部分は、小説の他の部分と異なり一切完了形を使用しない文体で、文観が実際に嚮嚮を用い、女人と交わるようなことを儀礼として行なったのか、教理上のものでして観想したのかが曖昧な描き方となっていて、最終的な結論は読者に委ねているところがある。

この本格的な邪教と一線をひいた文観理解は、研究篇においても確認できる。上述のように、「文観を立川流の大成者と解しても思想的には正しい。しかし、文観は、所謂立川流の派僧ではなかった。立川流で行動して居ない」とあるが、この井上吉次郎の文観評価は、性愛を直視したが故に教理を編み出すに至ったという、水原の文観理解と相合する(水原は、結果として生まれた「邪教」を糾弾している)であり、これは井上も同様である。人間本来の性欲を直視し、それと葛藤した結果、性欲を浄化するために教理・儀礼を創ろうとした文観の志を、水原が「真言密教のモダニティ」と評価していることを鑑みると、井上吉次郎の小説は、ある程度水原の意を汲み執筆されたと推測できる。(この推測には、官能を高尚なものに描いた美しさを評価して欲しい、という『文観上人』の新聞広告の文言を付け加えることができる。)

登場人物に歴史上重要な人物が現れないのも、出来事よりも文観の心象風景に読者の注目を惹起させるためであろう。魅惑的な女や稚児は、主人公・文観の煩悶や懊悩(広告でいうところの「心の悪魔の誘惑」)の引き金にすぎず、こうした感情を克服し諦念の境地にいたった文観が、尋常ならざる修法の創造へいたる上での重要な因子である。すべてはクライマックスの修法場面を準備する、文観の精神的な彷徨の過程を描くためのモチーフなのである。

また、妻帯是非論・高野山女人参拝是非論・僧侶の去勢事件など当時の真言僧をとりまいていた社会的問題を背景に立川流研究を進めていた水原の立脚点を考えると、井上は、文観の姿を借りて、水原を含む当時の真言宗の僧侶が直面していたであろう葛藤をリアルに描こうとしていたとも言える。

水原堯榮は、『邪教立川流の研究』以後、補足史料の論考を発表したのを例外として、立川流や文観に関する書籍を新たに出版することはなかった。自身の立川流研究の真意が伝わっていないジレンマもあり、小説の形で文士に自分のメッセージを託そうとしたのかとも思われる。このことは、前述のように、水原が彼の個人コレクションに属した文献を、井上に自由に利用させたと思われることから、推測できる。

水原がそれでも諦めずに、一九三〇年代にも未だに立川流の研究を続けていたことが、文豪・谷崎潤一郎との交流から分かる。谷崎は、昭和六年(一九三六年)年五月から、密教研究と称して高野山龍衆院内の泰雲院に籠もっていたが、内情は財政的に逼迫して税金の督促から逃げるために高野山に転居していたのである。このとき、谷崎は二番目の妻・丁未子と結婚した直後で、一二〇日間ほど高野山に居住し執筆活動に励んだ。この時期の生活的な側面を如実に語っているのが、丁未子夫人の書簡である。その第一報の抜粋は以下の通りである。

昭和六年五月二十一日和歌山県高野町龍衆院内泰雲院 谷崎丁未子より
妹尾きみ子様あて

(中略)夜の八時過ぎに目的地の親王院につきました。この和尚(水原堯榮)は学者なので大変結構でございます、その上非常に親切なので何も彼も大変都合に参ります(…)とにかく非常に面白い所で、自由に立川流なども研究できますから、できるだけ早くお出かけ下さい。とあることから、谷崎もまた立川流研究に関心があったことが読み取れる。ほかにも以下の様な回想や手紙が遺されており、谷崎がひやかしではなく、かなり真面目に水原の薫陶を受けていたことがうかがえる。

仏教信者でないものは御馳走(親王院の出していた精進料理)のために南無親王院様南無親王院様とありがたがっているが十八道を伝授してもらって今に大居士となるのだといって毎日香を焚いたり印を結んだりしている潤一郎はなかなか信仰が厚いらしい。

さらに、書簡には以下の様にある。

昭和六年九月十一日高野山 谷崎丁より妹尾君子様あて

此の頃毎午後親王院へ通つて十八道とお経のおけいこです。明日あたりから私も始めやうとおもつて居ります⁽⁹⁹⁾

十八道とは、真言の阿闍梨になるための加行の第一段階で、様々な尊格への儀礼修法の次第であり、具体的に儀礼の道場の建立の方法を学び、仏の供養として行われる真言と印契を習得することになる。谷崎が水原堯榮に傾倒していた様子は、谷崎の弟・谷崎終平も書き記している⁽¹⁰⁰⁾。

水原師も親王院の住持として無聊をかこつていた訳ではないのだから、連日自ら喜んで教えを授けていたのだろう。しかも、この時実際に水原から密教の教えを受けただけでなく、水原は夜ふけまで高野の天狗や狐狸の伝説を面白おかしく語り続け、谷崎に写本も見せたという⁽¹⁰¹⁾。これをもとにして聞き書き風に話し言葉のまま書かれたのが、昭和六年後半から翌年により執筆された『紀伊国狐憑漆掻語』である⁽¹⁰²⁾。さらに高野山増福院に所蔵される古文書を閲覧したうえで、『覺海上人天狗になる事』⁽¹⁰³⁾、また増福院が所蔵する天狗の骨を観覧しての随筆「天狗の骨」⁽¹⁰⁴⁾が著された。『少将滋幹の母』における浄観を行する場面は、水原堯榮の手ほどきで知った真言密教の古義を参考に執筆された⁽¹⁰⁵⁾。なお谷崎死後の机上には「書かれざる次作」のメモが遺されていたが、この創作メモには密教的雰囲気に近い字句や登場人物などがあつて、立川流か密教に取材した作品の構想があつたものとされている⁽¹⁰⁶⁾。おそらく、これも水原に師事した成果であろう。性愛の浄化・神聖視は、谷崎が小説の主題として得意にしていたものであり、完成していればどのような作品が出来ていたのか興味はつきない。

四. 井上吉次郎作成文観著作リスト

水原堯榮は、文観関連史料が散逸し、その著作の全貌が把握出来ないのを、著作で悔やんでいる⁽¹⁰⁷⁾。近年の文観研究の発展の大きな起動力となつたのは、散逸したと思われていた文観執筆のテキストや画像の所在が徐々に明らかになつてきたからである。その内容は、かつて網野が提唱したような異類の僧としての文観像の再考をうながすだけでなく、中世密教儀礼の世界を再構築する可能性も秘めたものとして注目されている。

具体的には、文観の伝記に関する一次史料(文観の弟子宝蓮による『瑜伽伝灯鈔』の一部が紹介されたのを皮切りに⁽¹⁰⁸⁾、内田啓一による美術作品の発掘⁽¹⁰⁹⁾、阿部泰郎を中心とする研究グループによる文観著作聖教群の再発見が主立った成果として挙げられる⁽¹¹⁰⁾。また、既述したように、彌永信美は、「立川流」という邪教の枠組みそのものが、仮想的なものであることを思想上導き出した⁽¹¹¹⁾。つまり、現在の文観研究は、従来言われてきたようないわゆる「邪教立川流」の枠組みでは把握できない規模の可能性を秘めたテーマとなつた。したがって、「立川流」という邪流の存在を前提とし、また文観と「立川流」の関係を問題基軸として掲げる水原堯榮の研究、さらにそれに依拠する井上吉次郎の小説は、宗教家の性愛問題という当時の社会的問題が実感できない現代人の目からは、精彩を欠いているように見える。しかし、既に見たように、水原堯榮との特別な関係から閲覧できた史料を井上が引用していたことを鑑みると、この著作は戦前における高野山の史料状況の記録として、それ自体に史的重要性が認められる。これらの史料の多くは、現在どこにあるか、現存しているかどうかも確認できないからである。第一節で述べたように、小説は、文観による修法創造の過程が高野山において繰り広げられたと想定して書かれており、その根拠には宥快の『宝鏡鈔』の既述だけでなく、専ら高野山において井上吉次郎が多くの文観関係史料を閲覧したことも考えられるのである。そこで、井上吉次郎の研究において特に着目されるのは、彼による一九三七年時点での文観の著作の目録である。以下そのリストを引用する(なお、リスト内にある「未発見」の表記は井上による⁽¹¹²⁾)。…

- 一、観音経秘鍵一卷(未発見)
 - 一、註理趣經四卷 興國四年十二月
 - 一、理趣經法一卷 延元四年六月七日
 - 一、理趣經法 延元四年六月廿九日
 - 一、大毘盧遮那佛眼法一卷 延元二年九月廿一日
 - 一、地蔵菩薩法最秘一卷 延元二年十二月七日
- (井上による奥書の筆写あり)
(井上による奥書の筆写あり)

東寺宝菩提院所蔵 『大日本史料』所収 理趣經法一卷（奥書のみ） 理趣經法 大毘盧遮那仏眼法一卷 地藏菩薩法最秘一卷 般若心經法一卷 千鉢文殊法甚秘一卷 釋迦法一卷 如寶八字文殊法一卷 普賢延命法一卷 瑜祇經法一卷 小野弘秘鈔	『続伝燈広録』 観音経秘鍵一卷 （未發見文書） 三毒三圓訣 （未發見文書）	東寺三密蔵 註理趣經	未確認文書 弘眞秘要抄（未發見文書） 秘決一括 前僧正弘眞 三觀私抄一冊 具支灌受職秘決一卷 梵漢同名綱釋 仁王經法日記一篇
--	---	---------------	--

一、般若心經法一卷 延元三年二月十七日

（井上による奥書の筆写あり）

一、千鉢文殊法甚秘一卷 延元三年五月一日

（井上による奥書の筆写あり）

一、釋迦法一卷 延元四年五月二日

一、如寶八字文殊法一卷 延元四年六月二十八日

（井上による奥書の筆写あり）

一、普賢延命法一卷 延元四年七月一日

（井上による奥書の筆写あり）

一、弘眞秘要抄（未發見文書） 記諸尊口決

一、秘決一括 前僧正弘眞

一、三觀私抄一冊 内題灌頂密印言觀觀念修行

一、具支灌受職秘決一卷 正中三年正月一日

（井上によると、「メモ風」⁽¹⁶⁾）

一、三毒三圓訣（未發見文書）

一、梵漢同名綱釋 正平丁酉八月自跋

一、瑜祇經法一卷 延元四年六月六日

（井上による奥書の筆写あり）

一、小野弘秘鈔 延元元年五月四日

（井上による奥書の筆写あり）

一、仁王經法日記一篇 建武二年十月廿一日

（井上による奥書の筆写あり）

以上の井上による文觀著作の目録は、東寺宝菩提院所蔵の聖教で『大日本史料』に挙げられているものおよび『続伝燈広録』において文觀に仮託されているものとおおむね一致している⁽¹⁶⁾。なお、水原堯榮も研究において言及していた『御遺告大事』がこのリストにない理由は、おそらく水原自身が、この聖教を文觀の師匠・道順の作としており、その意見を井上も踏襲したためであろう⁽¹⁶⁾。

リストに掲載された作品を、現在確認されている場所ごとにまとめてみると、左上の表のようになる⁽¹⁶⁾。

また、文觀研究とはかわらないが、現在は忍術研究の最重要史料として名高いものの、当時は全く知られていなかった『萬川集海』を最初に言及したのも、井上吉次郎である⁽¹⁶⁾。しかも、現在刊行されている翻刻の底本となっている大原本（内閣文庫、国立公文書館蔵）だけではなく、伊賀上野の勝矢氏所蔵なる二五巻全巻本や、澤村家に伝わるという写本の存在を言及するなどしている⁽¹⁶⁾。土地勘のあった新聞記者ならではの足を使い旧家を訪ねる実地調査で、個人蔵の史料群にまで到達することができたのだろう。現代の研究者には中々入り込めない地域密着型ネットワークを自ら作り、独自に史料の在所を把握できていたと言える。こうした井上吉次郎の史料発掘の業績をみると、『文觀上人』に附されたリストの価値は注目に値し、新たな史料の再発掘が期待できる所以である。

未確認文書のリスト内の『弘眞秘要抄』は、現在その存在が確認されている『秘密最極抄』や『最極秘密抄』とタイトルが類似していることから、この二点の文書のいずれかを指していた可能性もある（既に当時未發見ということとは、この『弘眞秘要抄』のタイトルも伝聞で、確実なタイトルではなかったと思われる）。『梵漢同名綱釋』は、遅くとも十四世紀前半に成立した『梵漢同名釋義』との関連が疑われる。

建武二年の奥書を有する『仁王経法日記一篇』も、タイトルから仁王経法に
関する文書であることは容易に想像がつくが、文観の伝記がある『瑜伽伝灯
鈔』において仁王経法に関する記述が二回みられることから、文観著作と
して存在していた可能性が大いにある。今後の各地の調査で、新たに文観著
作が出現し、再確認される契機になれば幸いである。

五. おわりに

井上吉次郎著『文観上人』の誕生には、言論人や小説家との交流を大切に
した高野山の知の巨人・水原堯榮の存在が関与していた。この小説の存在自
体が、仏僧とりわけ真言僧の性愛問題という社会問題に對峙していた戦前の
高野山の学問動向を如実に伝えている。現代の研究者が結果論からみると、
こうした学問の成果が、水原堯榮の意に反して、逆に邪教としての「立川流」



図二 大阪毎日新聞夕刊 1932年7月30日一面

像の再構築・定着に影響す
ることになったことは皮肉
と言える。

水原堯榮の業績は、研究
史の一部としてそれ自体が
歴史研究の対象とはなつて
来なかった。冒頭に述べた
ように、黒板勝実、藤懸静
也、中村直勝といった初期
の研究者の一部は、史料分
析を通じ、すでに「邪教」
としての立川流観や文観と
異端との関連を疑問視して
いた。一方、近年の網野史
学が、水原堯榮が描き井上
吉次郎が継承した「立川
流」観を曲解することによ

り、特殊な立川流理解が最近の史学界に浸透し、受容されることになった。
しかも、立川流研究が開始された当初の背景に関してはほとんど言及され無
かつたために、なぜ極めて偏った文観像・立川流理解が形成されるに至った
のかは不透明なままであった。井上吉次郎による『文観上人』は、昭和初期
の立川流研究の一端を伝える研究成果であると同時に、研究史の史料でもあ
る。小説が、水原堯榮の形成していた学術的なサークルから生まれたもので
あると理解することにより、初期研究の目的や視座がより明らかになり、現
在の研究の依拠してきた学術的背景が具体的に意識できるようになる。こう
した視点を踏まえることが、新しい見地を築くための糧になることを期待し
ている。

注

- (1) 井上吉次郎『文観上人』（人文書院、一九三七年）三頁。井上吉次郎の著作の多
くは、現在国立国会図書館の近代デジタルライブラリーから閲覧可能だが、『文観
上人』はまだアップロードされていない。筆者は、運良く古書店で購入できたが、
日本国内の大学図書館数カ所にも所蔵されており、それ程入手困難な書物ではない。
- (2) このタイトルは、大阪毎日新聞夕刊にて、芥川龍之介が自身の最初の本格的新聞
小説として連載した『戯作三昧』へのオマージュであろう。
- (3) 一九三〇年代の大阪毎日新聞への連載小説に関しては、高木健夫「編」『新聞小
説史年表』（国書刊行会、一九八七年）参照。
- (4) 『現代日本画美人画全集第三巻 北野恒富／中村大三郎』（集英社、一九七九年）
一七二頁。中村は、本が刊行された際の装丁も担当しており、外箱の仕上がりも含
め出来映えはなかなか潇洒なものである。刊行本内には、中村による白描の口絵が
六葉納められおり、中には胸をはだけたおすべらかしの女性や、稚児を抱く文観図
など、当時としてはかなり衝撃的だったであろう絵も見受けられる。しかし、挿絵
は十九回分十九葉あり、本には掲載されなかった最終回の新聞紙上の挿絵は、東寺
の談義本尊（台座に座した有名な弘法大師像）風の空海に、全裸のしどけない女性
がよりそうというイメージだった（図二参照）。中村自身は、官能的というより健
康・明朗・知性的な近代美人を画くことを得意とした画家である。前掲書九四〜九
五頁。
- (5) 広告は、筆者私蔵『文観上人』の末尾にあったものを参照。頁番号の記載は無い
が一八七頁にあたる。『弘法大師空海』は、昭和九年（一九三四）の空海一一〇〇
年御遠忌を記念して、同年大阪朝日新聞に連載され、直木の急死後釈瓢斎により完
成されたものである。

- (6) ジャーナリズムに関する随筆は『通信と対話と独語と——続・記者と学問の間』(井上吉次郎賀寿記念出版刊行会、一九六九年)にまとめられている。
- (7) 宗派替えをしたことにより、文観には法名が二つあり、律僧としての名前は殊音、真言僧としては弘真である。本論文では通称として最も定着していると思われる房号「文観」の呼称を用いることにする。文観の伝記に関しては、内田啓一『文観房弘真と美術』(法藏館、二〇〇六年)三三三～三五二頁掲載の表を参照。
- (8) 網野善彦『異形の王権——後醍醐・文観・兼光』(『異形の王権』平凡社ライブラリー、一九九〇年)一九五～二六二頁。(初版は一九八六年。戦前の研究については、本稿第三節を参照。
- (9) 彌永信美『密教儀礼と「念ずる力」——『宝鏡鈔』の批判的検討および『受法用心集』の「髑髏本尊儀礼」を中心として』(松本郁代『編』『儀礼の力——中世宗教の実践世界』法藏館、二〇一〇年)一二七～一五八頁、同『立川流と心定』『受法用心集』をめぐって』(『日本仏教総合研究』第二号、二〇〇四年)一三三～三一頁。
- (10) 現在は、彌永信美などの研究により、宥快によるこの「立川流」という範疇そのものが仮想的なものだったとする見方が提唱されている。確かに、「立川流」という真言宗の一派(血脈)は存在したが、それは他の同時代の血脈と変わるところがなかった。彌永、前掲論文、柴田賢龍「仁寛」など(『日本密教人物事典——醍醐僧伝探訪』上巻、国書刊行会、二〇一五)一一九頁下段～一二七頁上段。
- (11) 研究篇には『宝鏡鈔』(二二九～一四四頁)と『受法用心集』(一〇三～一九九頁)の両史料が翻刻・引用されている。
- (12) 『後醍醐天皇と文観僧正』(『虚心文集』第二 吉川弘文館、一九四〇年)五六九～五八八頁。(初出『史学雑誌』二十八編第一号、一九一七年)。
- (13) 兵藤裕己『歴史研究における「近代」の成立——文学と史学のあいだ』(『成城国文学論集』二五号、一九九七)二五五～二八〇頁。
- (14) 藤懸静也『文観僧正と八字文殊師利菩薩圖』(『國華』第三十編第三冊、通号三五二、一九一九年)一〇八～一四四頁。
- (15) 中村直勝『報恩院文観』『中村直勝著作集第二巻 社会文化史』(淡交社、一九七七年)四八三～四九四頁。(初出『日本文化史第七巻 南北朝』大鏡閣、一九二二年)。
- (16) 一般的には、まだ「邪教立川流」で語られるのが現在も主流であると言わざるをえない。
- (17) 日高町誌編纂委員会『日高町誌』下巻(ぎょうせい、一九七七年)一一〇五～一〇六頁。
- (18) 同上書。
- (19) このときに、「貧者の一燈二十円也寄付申候、井上吉次郎」という手紙を添えたと伝えられている。『日高町誌』下巻、一〇一四頁。徳本上人には、井上吉次郎自身、興味をよせていたようで、後に「徳本行者」なる随筆も執筆している。井上吉次郎『秘密社会学』(時潮社、一九三五年)五五～五八頁。

- (20) 自身の自伝においても、大阪転勤が大きな転機になったことを認めている。「井上吉次郎自分伝」(『記者と学問の間』井上吉次郎博士喜寿記念出版刊行会、一九六四年)四六五～四八四頁。
- (21) 井上吉次郎『同人評判記四、井上靖の文学修行時代』(前掲『通信と対話と独語と』四四六～四五〇頁。井上靖『毎日新聞と私』(井上靖全集第二十三巻)新潮社、一九七七年)三一七～三一八頁。
- (22) 井上靖『井上吉次郎氏のこと』(前掲『記者と学問の間』四六三～四六四頁。井上吉次郎は、井上靖の『室生寺の五重塔』においても新聞社の工部長として登場する。三枝康高『井上靖ロマネスクと孤独』(有信堂、一九七三年)一七九頁。
- (23) 井上ふみ(故井上靖夫人)『手記 靖と私』(『文藝春秋』一九九一年四月号)三二四～三三四頁。
- (24) 井上靖『対談集、聞き手・篠田一士、辻邦生』『わが文学の軌跡』(中央公論社、一九七七年)五一～五二頁。井上靖の毎日新聞社における宗教欄担当期の仕事に関しては、以下に詳しい。藤沢全『若き日の井上靖研究』(三省堂、一九九三年)四六七～四七三頁。
- (25) 井上靖『私の自己形成史』(井上靖全集第二十三巻)新潮社、一九九七年、一七～四四頁)三九頁。
- (26) 『井上吉次郎先生著作目録』(前掲『通信と対話と独語と』四七八～四八八頁参照のこと)。
- (27) 井上吉次郎『高野の獨壇場』(『サンデー毎日』一三三号、一九三八年)一〇頁。
- (28) 当時戦争の影響で、高野山系の末寺も空いている寺が多くなっていった。兩人とも日頃の研究の賜物か、筆記試験は合格していたものの、井上吉次郎は、深夜の修行中廻廊から転落して捻挫し、一方で靖は風邪の為に僧籍試験の第三次を欠席することとでその道は途絶えた。昭和十九年一月の事だったという。前掲『わが文学の軌跡』五三～五四頁、前掲『手記 靖と私』三三五頁、草柳大蔵『文壇の《国際銘柄》井上靖』(同『実力者の条件』文藝春秋、一九八五年)三六九～三九四頁。
- (29) 『邪教立川流の研究』(『水原堯榮全集第一巻』同朋舎、一九八二年)七五～二二九頁。今後の引用は、特に記載しない限り、全集の頁番号に拠る。
- (30) 前掲『わが文学の軌跡』五三頁。
- (31) 水原堯榮は、朝日新聞よりは毎日新聞との縁が深く、毎日新聞京都支局長の岩井武俊とも親しくしていたという。寿岳文章、中沢新一(対談)『成熟としての生——学問の道 宗教の道』(『仏教』三三号、一九八八年)一四二～一六二頁。
- (32) 『井上靖全集 第十一巻』(岩波書店、一九八二年)一～五三頁。
- (33) 井上靖『歴史の光と影』(講談社、一九七九年)二二五～二三〇頁。
- (34) 同、一三〇頁。
- (35) 水原堯榮『立川流聖典目録と現存聖教の内容に就て』(『水原堯榮著作集 第十巻 論文集』同朋舎、一九八二年、五四三～五七七)五六八頁(初出『密教研究』第

二号、一九九五年) 一〇二頁。

(55) 正田精俊「明治初期の僧風動向について」(『智山学報』第二五輯、一九七六年) 八一〜一〇〇頁。同『仏教社会学研究』(国書刊行会、一九九一年) 一〇五〜一二八頁。

(56) 肉食妻帯の広がりにより、多くの僧が「在家化」したが、多くの指導的僧侶が「肉食妻帯」に教義的正当性を認めず、妻帯僧とそうではない「純潔」な僧は区別されたと。リチャード・ジャフィ「限りなく在家に近い出家」(『末木文美士ほか「編」『ブッダの変貌』法蔵館、二〇一四年) 三六六〜三八五頁。

(57) この後者の動きについては以下に詳しい。池田栄俊「近代仏教の形成と肉食妻帯論をめぐる問題」(『印度学仏教学研究』第三十七巻第二号、一九八九年) 二六二〜二六八頁。

(58) 智山派系の議論の詳細は以下の論考を参照。奥野真明「近代の真言宗智山派における女性の受容」(『現代密教』通号一七、二〇〇四年) 二九一〜三三六頁。

(59) 今井幹雄「辜丸抜き取り事件」(同「編著」『真言宗百年余話 明治・大正篇』六六新報社、一九九六年) 二二〇〜二二六頁。

(60) 荒井、前掲論考、連載第二回、四〜五頁。

(61) 「立川流聖典目録と現存聖教の内容について」(『水原堯榮全集 第十巻』同朋舎、一九八二年) 五七四〜五七七頁。

(62) 後にこの論旨は、『邪教立川流の研究』において繰り返された。(全集採録前掲書、一八六頁)

(63) 規約に関しては堀井靖枝「高野山の女人禁制が解けたとき」(『女性史学』十五号、二〇〇五年) 一〇五〜一〇八頁。

(64) 宮坂宥勝『高野山史』(高野山文化研究会刊、一九六二年) 一六八〜一七八頁。こうして山内の女性居住が解禁されると、今度は山内に花街が形成され新たな風紀問題となった。高野山の遊里の存在に対しては、谷崎丁未子、井上吉次郎の証言がある。秦恒平「神と玩具との間 昭和初年の谷崎潤一郎」(六興出版、一九七七年) 一一九、一三九頁。井上吉次郎「村と町と」(刀江書院、一九三〇年) 二二八〜二二九頁。また、こうした現実を是としない硬派学生らの反感が、一九三七年の高野山鷲谷標柱抜取事件を惹起した。今井幹雄『真言宗昭和の事件史』(東方出版、一九九一年) 一三頁。

(65) 「現代女性の高野観」(『水原堯榮全集 第十一巻』五七〇〜五八八頁。これは、当時高野山へ参拝に来た女学生へ水原が講義を行った際、社会的に女学生等が高野山への意見をアンケートした結果の感慨である。(初出:『高野山時報』三七九号、一九二五年)

(66) 前掲『邪教立川流の研究』八五〜八七頁では、「性慾」肯定のためにアダムといヴについて言及す。同様の趣旨は、一二七〜一二八、一五二、一六一〜一六二、一八六、二二四頁でも反復される。

(67) 「悪魔(煩惱)の精練こそ聖者の出現するところ、そこに人間としての訓練を要し、そこに人間としての道徳が生れ、そこに文明人として宗教が成立する藝術が生れる:立川流の根本精神は人間在るがまゝの性慾を浄めて、生活の藝術化、人生の靈化をなすにあると思惟せられる:」(七八頁)。同様の趣旨は、八三、一六七〜一六八頁にもみられる。また、水原堯榮「地蔵院より新出の立川流聖教について」(『水原堯榮全集 第十巻』五七八〜五九四頁(初出:『密教研究』二十七号、一九二七年)では、立川流について「人間生理の理法を説き、本能の衝動に關する玄理を説述し、その作法をば宗教的藝術化して考えられた」としている(五七八頁)。

(68) 一五九〜一六一頁において、立川流が「性慾教育の方法宣傳をあやまつた」理由が考察される。

(69) 「獨り立川流の文觀、邪義弘通の文觀として蔑視するは、文觀の爲に一掬の涙を澍ぐわけである」と、彼を弁護している(二五一頁)。その後の一節では、「文觀の理趣経秘註を読む」と題して、この著作を高く評価している(二五一〜二五六頁)。

(70) 新聞一面の社説であり、無署名だが、当時の『六六新報』主筆は宮崎忍海で、この人物は『生の宗教』(六六新報社、一九二〇年)の作者でもある。

(71) 「邪教立川流の研究」本文にも、「立川流は我邦に於ける性の問題攷究に魁けをなして、他の宗教が未だこの方面に手をつけなかつた時に於て、既に業に性の攷究討論に思索を費やし、以て性の宗教を高唱せんとして、誤つて本能の盲動に任せてしまつたことに成り終つた」としている(二六二頁)これに続く節「立川流と性慾教育」では、立川流研究の現代的意義を説く(二六三〜二六六頁)。

(72) 水原堯榮の文体は、僧侶による言文一致体というような趣きがあり、朗読するとあたかも法話のように聞こえる。水原師の肉声は、短いが司馬遼太郎の紀行文に記録される。水原が文觀についての私見を尋ねられた際、「いい人じゃなかつたんですか(…)平常の行状を窺いますとね、態度は謹厳で身を律することが厳だつたように思います」と答えたと言う。漢文を読み下したような話し言葉である。司馬遼太郎「街道をゆく九 信州佐久平みち瀉のみちほか」(朝日文芸文庫、一九九八年) 二二二頁(初出、一九七六年)。

水原自身は清廉な僧であつたにもかかわらず、この著作発表後、「立川流の如實なる實驗者ではないか、などの烙印まで頂戴」したという。前掲「地蔵院より新出の立川流聖教について」五七八頁。

(73) 山陰棲霞「水原氏の立川流研究を評す」(『六六新報』一九二三年) 七〜一〇頁。

(74) その中には、水原の直接の弟子中川善教もいた。中川善教「立川流(秘められた文学)」(『国文学 解釈と鑑賞』三三三九、一九六八年) 一三五〜二四六頁。

(75) 山陰棲霞、前掲書、九頁。

(76) 高野山大学出版、一九三〇年(復刻版:高野山大学密教文化研究所、一九八二年)。この著作でも、文觀と立川流の關係性が論じられ、『理趣経』の誤解が立川流のよくな「左道密教」を生んだとしている。復刻版、五四〜五五頁。

- (77) 今井幹雄、前掲書、二二五頁。
- (78) 前掲『邪教立川流の研究』二二〇頁。この意見は、既に以下に見られる。水原堯榮「偽書經論目録の内容と立川流に就て」(『水原堯榮全集 第十卷論文集』) 五九五～六一九頁(初出:『佛教學雜誌』第二卷十号、一九二一年)。
- (79) 虚空洞人「邪教立川流の研究」を讀む(三・四)、『六大新報』一〇一六号、一九二三年) 一二頁。
- (80) 同「邪教立川流の研究」を讀む(一・二)、『六大新報』一〇一五号、一九二三年) 九頁。この書評は、水原著作の表題が与えた誤解を解こうとして、逆に誤解を与えるような説明をしている。
- (81) 山陰棲霞、前掲書、一〇頁、編集部追記「邪教立川流の批評に就て」。
- (82) 例えば、早稲田大学の歴史地理講義科目の教科書として、土屋詮教(一八七二～一九五六)により著された『日本宗教史』(自修社、一九二五年増補版)では、立川邪教の大成者として文観が紹介され(三二二～三三三頁)、大東文化大学教授・小柳司氣太(一八七〇～一九四〇)『東洋思想の研究』(関書院、一九三四年)では、立川流が一種の房中術として道教と比較される(三〇六～三〇八頁)。
- (83) 宗教制度調査会議に關しては、赤澤史朗、前掲書、一一五～一一六頁。
- (84) 『大正十五年九月七日宗教制度調査會議事録(第拾貳回特別委員會)』二〇頁。
- (85) 『在家(ウバーサカ) 佛教』(世界文庫刊行、一九二六年) 八三～八四頁。
- (86) 齋藤夜居「大正昭和艶本資料の探求」(芳賀書店、一九六九年) 一九一頁。築山尚美「広告・ゴシップの乱歩像——怪奇・猟奇・エログロの時代」(藤井淑禎編『国文学解釈と鑑賞別冊 江戸川乱歩と大衆の二十世紀』、二〇〇四年) 一四八頁。島村輝「エロ・グロ・ナンセンス」(島村輝「編」『コレクション・モダン都市文化第十五卷 エロ・グロ・ナンセンス』ゆまに書房、二〇〇五年) 六二七～六三六頁。
- (87) また、大抵のエロ・グロ作品は、新聞ではなく、専門雑誌に掲載されることが多かったことも付け加えておく。秋田昌美『性の獵期モダン』(青弓社、一九九四年)には、多くの媒体が紹介されている。
- (88) 島村輝、前掲書、六三五～六三六頁。
- (89) 寿岳文章、中沢新一、前掲書、一五二頁では水原が当時の高野山には珍しく齋戒沐浴派で生涯女を近づけなかったことが証言される。
- (90) 水原の考える現代的意義に關しては、脚注(七)参照。
- (91) 前掲脚注(五)参照。
- (92) 『文観上人』の新刊紹介(広告)においても、この葛藤が大事なテーマであることが強調されており「心の悪魔の誘惑と戦つた苦闘史」と評されている。
- (93) 前掲「地蔵院より新出の立川流聖教について」。
- (94) 大谷晃一「仮面の谷崎潤一郎」(創元社、一九八四年) 一一二頁。
- (95) 谷崎潤一郎の妻としては三番目の松子夫人(旧姓森田、根津)が有名だが、編集部で働いていたモダンガールで、二〇歳以上若い古川丁未子との結婚は実質的に一年にも満たず終了した。彼女については、永栄啓伸「評伝 谷崎潤一郎」(和泉署員、一九九七年) 二二〇頁。
- (96) 千葉俊二「谷崎潤一郎必携」(學燈社、二〇〇二年) 一六四頁。
- (97) 秦恒平、前掲書、一一七～一一八頁。
- (98) 谷崎丁未子「高野山の生活」(『改造』一九三二年二月号、四二～五〇頁) 四八頁。
- (99) 秦恒平、前掲書、二〇六頁。
- (100) 谷崎終平「回想の兄・潤一郎」(『谷崎潤一郎全集第十三卷』中央公論社、一九六七年、付録月報十三) 六～一〇頁。
- (101) 武田寅雄「谷崎潤一郎小論 生活理想と文学理想の融合点に生れた谷崎文学」(桜楓社、一九八五年) 八八頁。
- (102) 大谷晃一、前掲書、一一二頁。
- (103) 永栄啓伸、前掲書、一八九頁。谷崎丁未子による前掲「高野山の生活」においても、水原師が写本を持ち出して見せていた事が記録されている。「親王院様は大變學者なので、いろ、古い寫本など引き出して來ては非常に面白い話をして下さる」(四七頁)。
- (104) 『谷崎潤一郎全集第一五卷 乱菊物語 盲目物語 吉野葛』(中央公論社、二〇一六年) 四五九～四六九頁。
- (105) 武田寅雄、前掲書、九二頁。
- (106) 前掲「谷崎潤一郎全集第一五卷」四七一～四七五頁。
- (107) 同、五一〇～五一二頁。
- (108) 大谷晃一、前掲書、一一七頁。
- (109) 野村尚吾「谷崎潤一郎——風土と文学」(中央公論社、一九七三年) 一〇八頁。秦恒平、前掲書、一四三頁。
- (110) 前掲「立川流聖典目録と現存聖教の内容に就て」五四七頁。
- (111) 辻村泰善「『瑜伽伝燈鈔』にみる文観伝」(元興寺文化財研究 六九号、一九九九年) 一～五頁。
- (112) 内田啓一、前掲『文観房弘真と美術』、同「吉野・古水神社蔵両界種子曼荼羅——後醍醐天皇と文観房弘真」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要 第三分冊 日本語日本文学 演劇映像学 美術史学 表象・メディア論 現代文芸』五九号、二〇一四年、二九～四七頁。同「根津美術館蔵大日金輪・如意輪觀音厨子について——文観房弘真と制作背景」(『仏教芸術』三三四号、二〇一二年) 九八～一二三頁など。
- (113) 成果の紹介としては阿部泰郎「文観著作聖教の再発見——三尊合行法のテクスト布置とその位相」(名古屋大学大学院文学研究科「比較人文科学研究年報」第六号、二〇〇九年) 一一七～一三三頁、同「中世日本の宗教テクスト体系」(名古屋大学出版会、二〇一三年) 二四二～二六五頁。文観の現在確認された聖教史料の一部は、『中世先徳著作集』(臨川書店、二〇〇六年) 内所収で、その他は『文観著作集』の

- 題名で出版予定となっている。
- (114) 前掲脚注(九)・(二〇)参照。
- (115) 井上吉次郎『文観上人』九七〜一〇二頁。
- (116) 同上書、一〇二頁。
- (117) 東京大学史料編纂所編『大日本史料第六編之二十一』(一九二四年) 四八八〜四九四頁。
- (118) 「伝燈廣録続卷十一 天王寺別当弘眞」(『続真言宗全書第三三卷』高野山大学出版部、一九七五年) 四五七頁上段、四五九頁上段。
- (119) 水原堯榮『弘法大師影像圖考』(丙午出版社、一九二五年)の巻頭口絵写真にこの聖教の写真が見られる。これは、『邪教立川流の研究』二二七頁にも言及されている。現在では、このテキストは文観の自撰とされている。阿部泰郎『秘密源底口決』『二寸立行秘次第私記』解題(国文学資料館編『真福寺善本叢刊第二期3 中世先徳著作集』臨川書店、二〇〇六年) 六〇三〜六〇四頁。
- (120) ほかに、文観関連史料ではないが、高野山にまだ眠っている可能性のある史料として、井上著『秘密社会学』では、『野峰三階雲泥録』なる「高野に残された秘帖」が言及される。これは、学僧、聖、山伏の三階級には雲泥の差が存在し、とりわけ学僧が聖や山伏に優ることが主張され、その差別化のために服飾の規定などの格式が説かれたものようである。例えば「鉛刀を莫耶に濫し、魚珠を摩尼と疑ふ」ことが許されないなどの記述があった。これも存在が確認されれば、修験道研究においても中世社会史においても、当時の風俗を知る上で大変興味深い内容の史料であることは間違いない。井上吉次郎『櫻曼陀羅』(同『秘密社会学』三二〜三六頁)。
- (121) 井上吉次郎『甲賀流』(同『秘密社会学』一五三〜一六二頁。伊賀国忍術秘法については、以下の文献参照。藤田和敏『甲賀忍者の実像』(吉川弘文館、二〇一二年) 八五〜九三頁、沖森直三郎『古典紹介 菊岡如幻著 伊賀国忍術秘法について』(『伊賀郷土史研究』五号、一九七二年) 七九〜八八頁、『萬川集海』については、藤林保武『著』・中島篤巳『訳』『完本万川集海』(国書刊行会、二〇一五年) 参照。
- (122) 井上吉次郎『伊賀流』(同『秘密社会学』一七二頁)。
- (123) 伊藤聡『翻刻』『梵漢同名釋義』(国文学研究資料館「編」『真福寺善本叢刊第四卷 中世唱導資料集』臨川書店、二〇〇〇年) 四八七〜四九二頁。
- (124) 水原堯榮の「立川流」観の一貫性や、その研究の展開に関しては、今後研究する余地があるが、現在の史料の状況ではそれが困難である。

(この論文は Swiss National Science Foundation の助成により執筆された。)

Writing about the “heresy” of the Tachikawa Sect in prewar Japan - The origins of Inoue Kichijirō’s book “Monkan shōnin” and the influences of Mizuhara Gyōei

Rappo GAETAN

Monkan (1278-1357) was a monk in the Shingon School of Buddhism. As seen in his depiction by the famous historian Amino Yoshihiko, he was, until fairly recently, mainly known as a member of the “heretical” sect of Tachikawa, a movement inside the Shingon School known for its dark rituals, which employed extremely explicit sexual imagery. However, this view is being gradually challenged by recent scholarship on the issue. This evolution was made possible not only by the rediscovery of a large part of Monkan’s work, but also by innovative studies through which the historical validity of the Tachikawa Sect itself has come to be doubted.

Using a peculiar book published by the journalist Inoue Kichijirō (1889-1976) in 1937 as its starting point, this article takes a different approach, showing how and why people wrote about Monkan and the sect of Tachikawa in prewar Japan, and how the historical images of both this monk and sexual heresies in the Shingon School were constructed.

Analyzing the context and the main argument of prewar publications on Monkan and the Tachikawa sect, this article demonstrates that Inoue — together with such literary figures as Inoue Yasushi or Tanizaki Jun’ichirō — was in fact close to the main promoter of studies on Tachikawa in the Meiji and early Shōwa periods, Mizuhara Gyōei (1890-1965), a monk of the main center of the Shingon School, the Mount Kōya. It also analyzes how this book reflects the major issues that Mizuhara and other monks faced in their time, such as clerical celibacy and the place of women and sex in a newly defined monastic life. Finally, it reassesses the value of the research elements of Inoue’s book, showing that it contains information that may well lead to new discoveries in the study of Monkan.